
ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

猪

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜

【Nコード】

N8794Y

【作者名】

猪

【あらすじ】

突然人間からキモリになって、記憶も失ってしまった葉ヨウと、明るく心優しいが臆病なワニノコのベウ。ある時ふとしたことから出会ったこの2人は、救助隊を結成し、力を合わせてさまざまな困難に立ち向かっていく。

プロローグ（前書き）

はじめまして、作者の猪いのししです。このたびは、小説「ポケモン不思議のダンジョン〜葉の救助隊〜」を読んでくださりありがとうございます。少々長くなるとと思いますが、どうか最後までお付き合いください。

プロローグ

……ここは、どこだ……？

……そよ風が……気持ちいい……。

……どこかの草原に……寝そべってるようだ……。

……空気が……うまい……。

……なんてうまい空気なんだ……。

……それにしても気持ちいい……。

……このままずっと寝そべっていたい……。

「……え、ねえっつてば！」

……誰かが……呼びかけている……？

「ねえっつてば、起きてよ！ねえ！」

……うるさい。俺は寝ていたいのに……。

「ねえっつて！もしかして、死んでるの？」

……死んでたら返事もできないだろうが……。

……仕方ねえな、そろそろ、起きるか……。

プロローグ（後書き）

今回のお話は、主人公である葉の視点でしたが、次回からは、第三者視点でお送りします。

キモリとワニノコ（前書き）

第2話です。今回は2人の出会いと自己紹介が主なので物語の進展はほとんどありません。

ベウ「こんなペースで本当に大丈夫なの？」

まあ、はっきり言ってやってみなきゃ分からんwあと、もうすぐ期末テストだから勉強で更新遅くなるかも。

ベウ「今日から連載始めたのに、早くもそんな宣言しちゃうの!？」

ヨウ「ってか、試験勉強しろよ。」

……2人して痛い所突かないで。

キモリとワニノコ

ここは、ポケモンの世界。この世界に人間はおらず、ポケモンのみが平和に暮らしている。そんな世界のとある場所に、ポケモン広場とよばれる所があった。広場といっても、そこには多くのポケモンが住み、小さな村のようになっていた所だった。

「はあ……。」

ポケモン広場からそう遠くないところにある、名もなき小さな森のなかを、1人のポケモンがため息をつきながら歩いていた。そのポケモンは、小さなからだの割に発達した大きなあご、背中には赤いトゲ、短めで太い尻尾を持った、水色のポケモン、ワニノコである。

「どうしてオレは、こんなに臆病なんだろう…。」

そのワニノコが自分に愚痴った。

「結局今日も、ペリッパ―連絡所の前でためらって引き返しちゃったよ…。」

ワニノコは、歩きながらさらに愚痴り続ける。

やがて、目に涙をにじませながら言った。

「きつとオレなんか……この先ずつと臆病な
まま……一生……。」

ついに泣き出そうとしたその時、ふと、倒れ
ているポケモンがワニノコの目に止まった。

「あっ!!！」

ワニノコは目ににじませていた涙を 拭
い、倒れているポケモンに駆け寄った。

「ねえ、キミ、大丈夫？」

そのポケモンから返事は返ってこない。

「ねえ、ねえってば!!！」

やはり返事はない。

「ねえってば、起きてよ!ねえ!!！」

ワニノコはしだいに焦る。

「ねえって!もしかして、死んでるの?」

“死んでいる”その言葉を自分で言っておき
ながら、ワニノコは震え出した。

(ま、まさか…本当に…)

ワニノコの恐怖がピークに達しようとした、その時だった。

「う…ん…」

そのポケモンが、小さくうめきながら立ち上がった。

「ああっ！良かったあ〜っ！！」

ワニノコが思わず安堵のため息をもらす。

「誰も死んじやいな……………っ!？」

そのポケモンは、ワニノコと目が合った途端に、あんぐりと口を開け、ひどく驚いた表情をした。

ワニノコはきょとんとしながら聞いた。

「どうしたの？そんなに驚いて」

ポケモンはさらに驚きながら言った。

「ワニノコが……………しゃべった……………!？」

「え？」

ワニノコもさらにきょとんとした。

「オレがしゃべるのが…そんなに…変？」

その言葉を聞いて、ポケモンは考えこみだした。ワニノコは今度は眉をひそめながら言った。

「キミ、ちょっと変わってるね。ポケモンの世界なんだから、オレがしゃべってもおかしくないだろ？」

「ポケモンの……世界……？」

そうつぶやいたあと、ポケモンは一瞬考えると、ワニノコに言った。

「だったら変わってるのはお前の方じゃないのか？」

「え？」

ポケモンの発言に、ワニノコはまたきよとんとした。

ポケモンはさらに続けた。

「ここはポケモンの世界なんだろ？じゃあ何でお前は人間を前にして驚かねえんだ？」

「えっ！？人間！？」

その言葉を聞いた途端、ワニノコがすっとなきょうな声を上げた。

「人間　なんて、どこにいるの？」

「俺が見えねえのか？」

ワニノコの問いに、ポケモンがげげんそうに答える。

「何言ってるの？キミ、どう見てもキモリ

じゃん。」

「!?!」

ワニノコにキモリと呼ばれたポケモンはこの上なく驚いた表情をしたあと、身体中を見渡した。

(黄緑色の身体に腹が赤い……………！それにこの濃い緑色の尻尾……………!!！)

見渡しながら身体の特徴を心の中で言っつて、そして愕然とした。

「俺……………キモリに……………」

そう言いかけて口をつぐんだ。

(俺、何でキモリなんか……………あれ？)

キモリは必死に記憶をたどろうとするが、何も思い出せない。

(ど、どうゆうことだ!?!もしかして、記憶

喪失ってやつか！？な、何故！？)

考えれば考えるほど混乱していくキモリを見て、ワニノコはポカーンとしていた。

(本当に……変わっているのかも……。)

そう思いながら、ワニノコはとりあえずと
いう感じで切り出した。

「そう言えばまだ名前を聞いてなかった
ね。オレはベウ。キミは？」

ベウと名乗ったワニノコは、険しい顔で考え
続けるキモリに問いかけた。キモリはベウを
少し見たあと、また考えだした。

(俺の……名前……)

少しの間、沈黙の時間が流れた。

「どうしたの？なんで答えないの？」

ベウが訪ねた。だが、キモリは答えない。

「……………」

とうとうじれなくなったベウが、キモリを急かし始めた。

「もう、なんで何も言わないの？せめてうんとかすんとか言っ……………」

……」

その時だった。

「ヨウ。」

突然キモリは答えた。しかしいきなりだったためか、ベウは「え？」と聞き返した。キモリは繰り返す。

「ヨウ。木陰「カゲヨウ葉だ。」

ヨウと名乗ったキモリはまた考えだした。

キモリとワニノコ（後書き）

ベウ「名前もったいぶりすぎだろ……」（汗）「

それは多分今回の話の一番の反省点。（汗）
自分でも書きながらまずいかもって思ってた。

ヨウ「まずいのは作者のテスト勉強じゃなくてか？（笑）」

……この場でテストの話禁止令……（泣）

洞窟探検（前書き）

はい、久しぶりの投稿です。ようやく第3話が完成しました。

ベウ「第1話、第2話が一日で投稿されたのに対して、この差は一体？（汗）」

読めば分かると思いますが、今回の話は前回と比べてかなり長いです。でも実際は逆に、前回と前々回が短かったです。あと、ちよくちよく前回と前々回のミスを手直ししていたというのもあります。機会があれば読んでみてください。

ヨウ「さらっと大事なことを言っただけか？（汗）」

洞窟探検

また訪れた沈黙の時間……………

自分がポケモンになった理由を無言で考え続けるヨウに、それを静かに見守るベウ。

(本当に何もしゃべらないな…。)

そう思い、ベウはヨウに問いかけようとした。

「ねえ、キミつてもしかして……………」

そう言いかけたところで、ヨウが何かを感じとったように急に顔を上げ、そして地面を見た。ベウは一瞬げんな顔をしたが、その動作の理由はすぐに分かった。大きな地震が起きたのだ。

「わわわわっ！地震だ！！」

涙目で慌てるベウに対して、ヨウは警戒した表情で黙ってバランスをとっていた。しばらくすると地震はおさまった。

「……………ふう、おさまったみたいだね。」

ベウはホッとしながら言った。
その時だった。

「怖いよ〜、誰か助けてえ〜」

「えっ!?!」

かすかだが、確実にどこかからするそのような声をベウは聞き逃さなかった。

その声はさらに

「え〜ん、え〜ん、助けてえ〜」

と言った。

ベウは辺りを見渡し、声が出た方向を確認するとその方向を指差しながら言った。

「ヨウ!今、この方向から……っであれ!?!」

ベウはヨウに伝えようと横を向くが、彼も先ほどの声を聞いていたらしく、ベウの横にいたはずのヨウは、既に声が出た方向に走り出していた。

「あっ!待ってよ〜〜!!」

一足遅れて、ベウも走り出した。

ヨウはしばらく走ったところで、地面が裂けてできたと思われる穴を発見した。穴の底は暗くて見えない。そして先ほどの声は、この穴からであると分かった。

「助けてえ〜！誰か助けてえ〜！」

(……………ここか。)

ヨウは穴からする声を聞き、心の中でつぶやいた。

「……………はあ、……………はあ」

息を切らしながら、ベウも追いついた。

するとヨウは、近くにあった石ころを拾い、穴に投げ込んだ。
すぐに石ころが穴の底についた音がした。

(飛び降りれない高さじゃない…。)

ヨウはまた心の中でつぶやいた。そして飛び降りようと、わずかに
かがんだところで、ベウがヨウに注意した。

「危ないよヨウ。少し離れないと穴に落ちちゃうよ。」

するとヨウは、そのままの姿勢で一言。

「声はこの穴からだ。」

それだけ言うと、ヨウは暗くて底が見えない穴に顔色ひとつ変えず
に飛び降りた。

「あっ！！」

ベウは慌てて穴を覗き込んだ。

「ヨウー!!」

しかし、ヨウの姿は既に見えなくなっていた。ベウはさらによく見ようと、穴の縁に手をつけて身を乗り出した。しかしすぐに手を滑らせ、穴の中に真つ逆さまに落ちていった。

「えっ!?! わあああああああ………」

ベウの悲鳴が穴にこだました。

先に穴に飛び降りたヨウは、見事に着地すると、警戒しながら辺りを見渡した。そして自分の正面に洞窟を確認した。

(……………よかった…見えないほどの暗さじゃないな。)

そう思いながら、洞窟に進もうと足を一步踏み出した。その時だった。

「……………あああああああああ!!」

突如頭上から聞こえてきた謎の悲鳴に、ヨウが上を向くとそこには恐怖で目と口をいっぱいに開き、涙と鼻水でぐしゃぐしゃになったベウの顔があった。

「!?!」

突然のホラーフェイスにぎよっとしたヨウは、その場で硬直してしまい、落ちてくるベウを頭で受け止める形となってしまった。

「うぐっ！」

「痛あっ！！」

ヨウとベウは同時に声をあげ、それぞれ頭を押さえて痛がった。頭を押さえながらも、ベウはヨウを見つけると、泣きながら彼に飛びついた。

「うあああ！！怖かったよおおお！！」

「……………（怖かったのは俺の方だ…。）」

自分にしっかりと抱き付き、涙と鼻水で肩を濡らすベウに少し引きながら、ヨウはそう思った。

ベウを少々乱暴に引き離すと、ヨウは問いかけた。

「何で……………降りてきた……………？」

その問いに、ベウは首を横に振ってから答えた。

「穴を覗きこんだ拍子に落ちちゃったんだよ。本当は飛び降りる気なんてなかったのに…。」

そう言ったあと、ベウは辺りを見渡し、そして震えながら言った。

「……………暗い……………」

「お前、怖いのか？」

明らかにおびえた様子のベウを見ながらヨウは言った。

「う、うん。」

ベウはおびえながらも少し恥ずかしそうに答えた。

「ならお前はそこで待ってる。」

それだけ言うと、ヨウは洞窟に向かって歩き出した。

「えっ？あつ……ちょっと待ってよ！オレ、一人でいるほうが怖いよ……！！！」

そう叫びながら、ベウも洞窟に入ってしまった。

「暗いなあ、怖いなあ」

洞窟に入ってまだ間もないが、ベウは震える体をヨウにぴったりと寄せ、この言葉を一定時間ごとに呪文のように言い続けている。

「……………くつつきすぎだ。」

ベウの微振動に耐えかねたヨウが一目見てつぶやいた。

「ごめん……だって怖いんだもん。」

ベウは謝りながらしぶしぶ離れたが、腕は離さなかった。

(……………無理矢理でも待たせておくべきだったかな……………。)

そう思いながらふと目を戻すと、洞窟の壁にもたれかかる一匹のポケモンが目に入った。

そのポケモンは、赤い複眼を持っており、身体の色は紫色、そして背中に大きな白い羽根がある、モンシロチョウのようなポケモン、バタフリーだ。

「はあ……はあ……」

よく見るとバタフリーは傷だらけで、疲れきったように肩で息をしていた。

「あつ！ちよつと、大丈夫！？」

少し遅れてバタフリーに気付いたベウが、駆け寄った。

「あ……あなたたち……は……！？」

バタフリーが息を切らしながら問いかけた。

「オレはベウ。で、こっちがヨウ。それよりその傷大丈夫？」

ベウが心配そうにバタフリーの身体を見渡す。

「わ、私は平気です。それより、私の子供が…キヤタピーちゃんが……」

そう言って洞窟の奥に目を向ける。奥からは、誰かがすすり泣くような声が聞こえる。

バタフリーはさらに続けた。

「突然地面が裂けて、キャタピーちゃんがその穴に落ちてしまったのです。私も助けようと穴の中に降りたのですが、ポケモン達に襲われて……このとおりです。」

バタフリーは悔しそうに言うつとつむいた。

「ポケモンたちが……襲ってくる!?!」

ベウが信じられない、という様子で言った。
しかしヨウは、

「この奥だな？」

とだけ言つと洞窟の奥に向かって歩き出した。

「えっ!?!ちょっと、聞いてたのヨウ!?!
ポケモンたちが襲ってくるって……」

「怖いなら待つてろ。」

ベウの言葉を途中で切り、一旦立ち止まってヨウが言った。
その言葉にむつとしたベウは、

「それはやだ。」

不機嫌気味に言った。

「ならばとつと行くぞ。」

再びヨウは歩き出した。

ベウも付いていこうとし歩き始めた時だった。

「お待ちください」

ベウの背後から声をかけたのは、先ほどのバタフリーだった。
さらにバタフリーは

「これを持って行ってください。」

と続け、小さな青い木の実を差し出した。

ベウはバタフリーのもとへ行き、木の実を受け取ると、言った。

「これは…オレンの実……。」

「いざというときに役に立つはずです。それより……。」

バタフリーは真剣な眼差しでベウを見ると言った。

「子供を…お願いします。」

恐らく先ほどの会話から察したのだろう。

その言葉にベウは少々頼りなくうなずき、

「う、うん。頑張るよ。」

と言い、オレンの実を右手に握りしめ、見えなくなりつつあるヨウを急いで追いかけた。

バタフリーと出会った場所からさらに進んだ所に、ヨウとベウがいた。洞窟は少しばかり迷路のようになっていたが、絶えず泣き声が聞こえるため、迷うことはなかった。

ベウは相変わらずヨウの腕を左手でしっかりと掴み、恐怖で震えていた。

そんなベウに呆れて、ヨウが文句を言おうと目を向けたその時、

「あつ！あそこー！！」

ベウが正面を指差しながら叫んだ。ヨウもその方向を向くと少し広い空間の真ん中で、すすり泣く一人のポケモンがいた。

黄緑色で細長い身体に、尻を向けているためよく見えないが、恐らく額のあたりから出ている赤い二又に分かれた触角が確認できる。

「ねえ、キミ！」

「えっ？」

ベウが話しかけた。そのポケモンは、ベウの声に気付くと振り向いた。

黒くて丸い、涙が浮かぶ大きな目と視線が合った。

（間違いないな。こいつがキャタピーだ。）

そう思い、ヨウはベウの左手を離させると、一歩前に出て、言った。

「お前を助けに来た。」

そして、キヤタピーに近づこうと足を進めると、

「あ、危ないよー!」

突然キヤタピーが叫んだ。

(なに!?)

その叫び声に気付いたヨウは、とっさに後方に飛び退いた。

その直後、ヨウが立っていた地面に何かが激突し、土煙が上がった。

「な、何!? 一体何が起こったの!？」

その光景を見ていたベウが、慌ててヨウに駆け寄った。

「ちっ、外したか……。」

土煙の中から悪意のこもった声がした。

「だ、誰!? 早く出てきてよ!!! 何で突然襲うの!？」

その言葉に答えるかのようにポケモンが姿を現した。

見た目が卵そっくりというより、卵に目をつけただけという感じのポケモンが、合計6人いる。

「オレ達はタマタマ兄弟だ!」

恐らくリーダーと思しきタマタマが声を張り上げて答えた。

さらに今度は別のタマタマが言った。

「何で襲つかって？最近地震や自然災害が多くてムシヤクシヤするから、ここに来る奴らをボコボコにして、ストレス発散してるのさ。」

「そ、そんなことのために…？」

ベウはその答えに驚きを隠せない様子だ。
ヨウは黙ってタマタマを見ている。

「それにしても、惜しかったですね兄貴。」

先ほどの二人とはまた別のタマタマが言った。

「そうだな。あのキャタピーが余計なことを言わなければ……」

また別のタマタマがそう言うと、六つの視線が一斉にキャタピーの方に向いた。

「ひっ！！」

キャタピーが恐怖で震える。

リーダーと思しきさっきのタマタマが、にらみを利かせながら言った。

「おい、ガキのくせに小賢しいことしてんじゃねえぞ。痛い目に遭いてえのか？」

さらに今度は先ほどリーダーの次に話したタマタマが同じくにらみを利かせて言った。

「子供だからって許してもらえと思うなよ?」

タマタマ達はキャタピーににじり寄りついていく。キャタピーはただただ震えることしか出来なかった。それを見ていたベウは直感的に、

(た、大変だ!止めなきゃ!!)

そう思った。

しかし、身体の方は震えて言うことをきかない。

タマタマはさらにキャタピー近づいていく。その時だった。

「つくづくおめでたい奴らだな。」

そう言ったのは、ヨウだった。

タマタマ達もその声に気付き、振り向いた。

ヨウはさらに続けた。

「ストレスがたまってるこんな所でこんな小さなガキをいじめてよ……しかもそれを堂々と言いはなってるよ……」

ここでヨウは、哀れむような表情から突然険しい表情となって、

「救いようのない、とんだゲス野郎どもだな。」

と言った。

「ヨ、ヨウ?」

ヨウのあまりに険しい表情ととんでもない暴言に、ベウは恐れを感じた。

しかし、タマタマ達の方はというと

「…は？てめえ、もっかい言ってみろ……」

リーダーと思しきタマタマが怒りで声を震わせながら言った。他のタマタマ達も全員、顔を真っ赤にして爆発寸前といったところだ。しかしヨウは、今度は馬鹿にするような笑みを浮かべながら、

「聞き取れなかったのか？お前らにお似合いの言葉を探してやったの。」

と言った。

これで怒りが頂点に達したタマタマのリーダーは怒鳴った。

「てめえ殺されてえようだな！！おい、やるぞてめえら！！」

他のタマタマ達も怒りが爆発したらしく、奇声に近い声をあげながらヨウとベウに襲いかかった。

洞窟探検（後書き）

ベウ「今回はヨウがよくしゃべったね。」

でも暴言とか皮肉とかしか言っただろ？こんなふうにヨウが長くしゃべる時は半分くらいのこと言わないから、そのつもりで（笑）

ヨウ「……………しばくぞ、作者……………」（怒）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8794y/>

ポケモン不思議のダンジョン～葉の救助隊～

2011年12月1日01時53分発行